
飛影の黒炎

海東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛影の黒炎

【Nコード】

N3719U

【作者名】

海東

【あらすじ】

烈火の炎 の紅麗の双子の弟になってクロスオーバーな世界でお宝を盗みまくる話です。

主人公は幽遊白書の飛影に極似の転生者です。

第01話 飛影は脱獄する

時は戦国時代

炎術士を長とし、魔導具を操り戦場に立つ『火影』という異能の忍者集団が存在した。

その火影一族、八代目頭首である桜火と側室である麗奈の元に双子の兄弟が誕生した

名は兄、『紅麗』と弟、『飛影^{ヒエイ}』

現在、産後数十秒程経過したが弟、飛影は困惑していた

死んだと思ったら赤ん坊になっており、追い討ちと言わんばかりに黒い炎が体全体から放出されているという異常事態。

「おぎゃー！！！！！！（意味わかんねー！なんだこの黒い炎はあー！！！！）」

更に前世の記憶を持ちながらの転生。もう理解の範疇を越えてしまっていた。

もう理解不能だ。

「くっ黒い炎とな！？ふ不吉だ…」

産婆の呟きに今後がどうしても心配になってしまつ飛影であつた。

そして、時は経ち、二年後。

飛影は外にも出されず暗い地下牢に幽閉されている。

なぜなら、飛影が呪いの児と認識されてしまったからだ。

火影一族では炎術士が一代に2人の現れた場合、一人は呪いの児と呼ばれる

よつて、史上かつてない闇を彷彿とさせる黒い炎を宿した飛影は、産まれながらに呪いの児と恐れられ地下へと幽閉された。

里の飛影に対する警戒振りは原作紅麗以上だった。

「まったく、ついてねえ！本当は烈火が呪いの児なのに、まだ産まれてないだろうし……つかそれ分かるの数百年後だし……紅麗も確か呪いの児って呼ばれてたのに……なんで俺がこんな目に……」

そう、この世界は漫画『烈火の炎』の世界で、飛影は主人公 烈火の腹違いの兄 で、紅麗の双子の弟 。

そして、重要なのが容姿も名前も 幽遊白書 の飛影にソックリなのだ……若干紅麗似ではあるが間違いなく幽白の飛影である。

黒い炎は出るが、幽白飛影のチャームポイントである額の邪眼は無いのには安堵した。

額に目なんてあつたら間違いなく人外扱いされ今以上の劣悪な環境になっていただろう。

もしかしたら、産まれた直後に殺されたかもしれない。

なんにしても、最低な家庭環境なのは間違いない。

「ほら、飯だ」

「……」

飛影の元に来る輩達は構うと因縁を付けられ、ろくでもない事しかないのは産まれて二年程だが体中の痣がものがたっている。

「ちっ、気色の悪いガキだ」

反応を示さない飛影を睨み付け、男はその場を離れていった。

飛影は無言で飯を食らう。

「相変わらずクソ不味い飯だ。ああゝ牛丼食いてえゝ」

それにしても、今のこの状況は最悪である。

クソ不味い飯に虐待、監禁、育児放棄、、、どこの犯罪者集団ですか？と問いただしたい気分だ。

それにしても、ここまでして何故殺さないのか？

恐らくだが、原作紅麗の例もあったし、父、桜火が八代目権限を使って庇ってくれてるのだと思う。

それでも、危険な香りのする黒い炎を放っておくのも危険なので、妥協して監禁に留めてるといった所か？

だが、人というものは未知の存在に恐怖するモノだと思うので、いつ殺されるかなんて分かったもんじゃない。

流暢に喋れるようになったし、体も思う通りに動くようになった。

それに何より黒炎。

黒炎にはあらゆる対象を 支配 する特殊能力が備わっていた。

それに気付いた時、「あっ…チートだ!」と思ったのは数少ない
良い思い出の一つだ。

黒炎に触れたモノは 人 であろうと 幻想 であろうと何でも支
配下における。

二歳児だろうがこの能力があれば、戦国時代だろうとどうにでもな
る気がする。

ム力つくこの里を滅ぼすのもいいがどうせすぐ滅びるので、わざわざ
自分の手を煩わすのもダルい。

と、言うことで……

「脱獄しますかね」

第02話 盜賊飛影誕生

「魔導具頂きに行きますか」

ボワッ

何事にも計画は必要。

周囲の目を欺く為に偽装しておいた虐待の傷跡を黒炎で消す。

右腕に巻かれた包帯型封具で、炎術士の力が封じられていると周囲には思われているので見張りなどを張り付かせない為の偽装。

まだ二歳児だと侮っていることもあるだろうが、偽装のお陰か脱獄し放題。

「誰もいないな、静かなもんだ」

念の為、周囲の気配を探り、人氣が無いことを確認し飛影は行動を

起こした。

「精々、監禁し虐待した事を脱獄後に後悔すればいい」

飛影は顔を歪ませ嘲笑う。

時刻は深夜、人々は寝静まっている頃だろう。

『ゲート』

ボワッ

右手から黒炎を放つと時空間を支配し地下牢から外へ続く扉を作り出す。

下調べは既に済ませてある。

向かうは、魔導具保管庫。

火影の里 魔導具保管庫内

「ハハッ！！警備もないとかマジ油断しすぎだから」

火影忍軍の警備マジザル過ぎる。

扉に呪符が貼ってあったが余裕で無効化。

正直、見つかるかどうかドキドキ！といったスリルを味わいながら
犯行に及びたかったが、もう既に盗み出した後だ。

あっけなさすぎてマジ萎えた。

よっぽど、呪符に自信があったのだろうが、警備くらい置いておけ
と言いたい。

盗んだ魔導具は、蔵の文字が書かれた四次元ポケットな魔導具 蔵
王 に全て収納済み。

盗んだ数は 二十数点 だが、原作で有名所な五行系などの上級魔導具は全て無かった。

任務中の忍者が使用中か、所有者が決まって無い物だけが保管庫に残っていたのかは分からないが、まあいい。

今ここで、里中を駆け回り魔導具を奪い尽くすのもぶっちゃけ面倒。

いずれ未来になれば、それらが大量に集まる武闘大会が開かれるので、それまで楽しみは取っておく事にする。

ボワッ ボワッ ボワッ

そして、魔導具保管庫に続き、食料庫、書庫、武器庫と次々に襲うと、それらを 蔵王 に詰め込んでいった。

「こんなもんか」

金や食料など存分に盗んだので当分食うには困らないだろう。

今は もう、この里でやることもない。

これからは希望溢れる人生へ歩き出すとしよう。

『ゲート』

ボワッ

「次、来るときは火影忍軍終焉の日……クッククッ」

黒い炎と共に、 呪いの児 飛影は火影の里から姿を消した。

悪魔よりも残虐で、 森光蘭や大蛇丸よりも外道、 陰謀好きは無能王
ジヨゼフを上回る。

原作飛影の面影は姿形のための頭の中はクソ外道。

奪って奪って奪い尽くす。

殴られる前に殴り、奪われる前に奪い、殺される前に殺す。全ては
先手必勝。

欲にまみれた 盗賊 飛影の大冒険がここから始まる。

第03話 拠点と気？念？

「ハアハア……疲れたあゝ」

どうやら黒炎のチートさに慢心していたようだ。

集落を目指して街道を歩んでいたのだが……二歳児の体は歩幅が狭く、体力も無く、身体は既に疲労困憊。

ちよつとでも鍛えておけばよかった……と二歳児が旅をするなど大変無謀な事だと思い知った。

黒炎を使えば、瞬く間に目的地へとたどり着くが、前世であった位の筋肉と体力は欲しい。

よって、戦闘以外はなるべく黒炎や魔導具などを使わずに体を鍛えようと思ひ付き徒歩にしたのだが…

この時代の道は、整備すらしていない荒れた道ばかりで、あつとい

う間に体力がなくなり、ゼエゼエと息は荒く汗まみれ。

思えばまだ二歳……甘かった……脱獄ちょっと早まったかな？

何にせよ、1から鍛え直す必要があるようだ。

「修行といったら山籠もりだな」

影を媒介として、遠隔透視や瞬間移動が出きる魔導具『影界玉』で周囲を探索。

すると、水辺の近くで緑も豊か、その周辺には美味しそうなお動物達が多く存在している場所を発見した。

「ここにするか」

その近くの広がった土地を探し出すと影界玉で移動し、蔵王から石棍を取り出した。

ちなみに、石棍は六尺棒型の魔導具で、岩石に突き立てるとそれを自由に變形、操作する事が出来る。

「おりゃ」

ズサッ

その石棍を地面に突き立て、周辺から岩石を集め巨大な塊を作る。

そこから、塊の中に広いワンフロアの空間を作り適当に間取りを決め、石を操作した。

はい！あっという間にお家の完成です。

ついでに、家具なども石を操作し思いつく限り作り上げた。

「魔導具ちよ〜便利」

そして、蔵王から、里から盗んできた生活用品や布団などを取り出し並べてゆく。

カランコロンッ！

「ん？魔導具か？……念？そんなのあったっけか？……まあいいか」

念　と書かれた小さな玉型の魔導具を蔵王に戻し、戦利品の整理を始めた。

「半年分位の食料はあるか、魔導具は蔵王に入れとくとして、肝心なのがコレだ」

と言って、取り出したのは大量の巻物と書物。

書庫から盗み出したそれには、各魔導具の扱い方や忍術、体術、家系図など様々な種類があつた。

その中でも飛影がもつとも欲していたのは、最凶魔導具『天堂地獄』が封じられている場所である封印の地までの手掛かりだ。

原作で、森光蘭が探し出したのだから、必ずその手がかりが、なしかしらの手段で残されていると考え、目に付く限りの物を盗み出した。

「おっ！コレかな？」

禁と封をされた巻物を開き中身確かめる。

「ビンゴ！」

天堂地獄が封印された場所が分かった。

黒炎があれば、天堂地獄は支配下に置ける……はず。

念の為に、攻撃かわせるくらいまで強くなっておくことにしよう。

その後は逃げるけど。

支配出来なかった時の事など知りません。

「みんな逃げて食べられちゃうよ！逃げて！」と忠告くらいはしてあげようかな？……多分。

そして、読み進める内に発見したものがあつた。

天童地獄の他にも禁術やら、原作では聞いたことの無い魔導具の事も記してあつたのだ。

そして、その中には、先程見つけた『念』と書かれた魔導具の事も記されていた。

「幽遊白書の次はハンター×ハンターか、まあ富樫作品好きだから良いんだけど」

銘は『念能力』。

はい、能力はまんまハンター×ハンターの念能力です。

どうやら、人には気と呼ばれる力があり、念能力の魔導具は気の変化を与えそれをハンター×ハンターの念能力の様に応用出来るらしい。

だが、これまで念能力の所有者になったものは扱いきれず必ず死に至ったそうだ。

恐らくだが、死の原因は精孔を開いた時にオーラを制御出来ずに気が尽き果て死に至ったのだろう。

そして、その後、何度も似た理由で使用者が死に念能力は封印指定。

だが、不思議と封印されずに何故か俺の手元にあるが……。

この念能力の魔導具を発動するには石島土門の鉄丸の様に、飲み込む必要があるそうだ。

「まあ、もしもの時は黒炎で支配すればいいか……」

はい、飲みますよ！死の危険も無いようなもの。

リスクなどはほぼ無いに等しく、リターンも大きい。

そんな念能力の様な便利な能力是非とも欲しい所だ。

ゴクリッ

そして、念能力を手に取り飲み込む。

「うおっ！」

飛影の身体から溢れ出すオーラ。

勢いは次第に強くなって行く。

…そして

ボワッ

「まっ、人生こんなもんさ」

黒炎を使い気のオーラを支配下に置き発散しないよう留める。

百年に1人の逸材なんて、そんな都合よく現れません。

念能力の才能はよくわからないが、ゴンやキルアみたいにはなれないようだ。

だが、この世界ではただ1人だけの一点物の能力。

有効利用させていただきですか。

第04話 火影の人々

飛影が火影の里から逃亡した翌朝。

「して、蔵の封が破られ魔導具が全て奪われたと……」

深いため息を尽き頭を抱える桜火率いる火影の上役達。

「はっ、他にも食料、武器、書物も等しく奪われております」

「むむっ、盗人は未だ不明なのだな？」

「はっ、目撃者もおらず、手掛かりは未だ発見されておりません」

「どつしたのか……」

里の要である魔導具が盗まれるという火影一族始まって以来の事態に動揺を隠せずにいる者や憤る者、反応は様々だ。

長年、秘匿し独占して来た魔導具の存在が明るみになってしまえば、日本中の武将達に狙われるのは必然。

盗まれた魔導具で里を襲われ、残った全ての魔導具が奪われれば、火影一族滅亡などという大惨事となる可能性は極めて高い。

そう考えると一同は、背中に薄ら寒い物を感じ、嫌な汗が流れる。

「呪いの児はやはり、不吉の前兆か……」

周りからこぼれるその呟きに、桜火は悲しげに顔を歪ませる。

「桜火殿おー！大変でございますー！！」

「どうした、なにがあつたんじゃ」

「地下牢に幽閉しておりました飛影の姿が見当たりません」

「なっ……」

嫌な予感が、桜火の頭をよぎる。

「……もしや」

飛影はまだ二歳……普通に考えれば飛影の犯行などと言うのは有り得ない事なのだが、飛影のあの闇を彷彿とさせる黒い炎を思い出すと、どうしても不安を感じずにはいられなかった。

「桜火殿……これはもしや……」

「……うむ、しかし飛影はまだ2つになつたばかり、やはり下手人は他におると考えた方がよからう」

やはり、いまだ幼子の飛影では無理がある、と先の不安を消し去る。

「ひとまず、飛影は、下手人に連れ去られたと思って搜索に当たって欲しい。敵は誰にも気付かれずに、これほどの盗みを働く実力者……十分注意するように」

桜火の指示の元、搜索が始まるが、半年経つてもたいした成果は上げられなかった。

そして、飛影失踪から一年。

未だ、魔導具と飛影の行方を搜索しては居るが、進展は無し。

数少ない飛影を知る者達は、その生存を諦めていた。

呪いの児が死んだかもしれない……だが、ただそれだけの事。

もとより重要なのは飛影の命よりも、盗まれた魔導具や書物なのだ。

「呪いの児が消えたのは喜ばしい事だが、魔導具や書物の事は見つからんでは話にならん」

里の情報が詰まった書物に神秘の力を持つ魔導具を奪われたまま放置する事と言う選択肢は彼らには無い。

「まことに仰る通り、もしやと思うのだが、確か盗まれた書物の中には、天童地獄の事も記されてあった。賊は、そこへ向かったという事はないか？」

「有り得る話かもしれん、封印される程の強力な魔導具。興味を持つ可能性は高い。だがもしそうだとしたら賊は既に死んでおるかもしれない」

「うむ、あの魔導具は危険と聞く…もし狙ったとすると生きておる可能性は低いじゃろうな」

天堂地獄が封印されたのは初代頭首の時代。

盗みに入る輩は呪われてしまい腐っても死ねなくなる。

だが、その実態を知るものは少なく、彼ら里の上役達も巻物に記されている封印の地の場所やその危険性を訴える記載以外はなにも知らずにいた。

「では、調査に行かせるか、死体と一緒に魔導具も見つかるやもしれん」

微かな希望を託し会議は終了した。

「しかし、忌々しい。飛影などが産まれるからこのような事が起きるのじゃ」

「全くだ、産まれてすぐ始末すればいいものを、桜火殿は甘すぎる」

「仕方の無い奴じゃ、呪いの児と言えど我が子は可愛いのだろうの」

「しかし、紅麗は誠に炎の児なのだろうか？あの子からは何やら嫌なものを感じるのだが…」

「確かに、分からんでもない。双子の片割れがアレじゃし、紅麗ももしかしたら…」

「そうじゃの、あり得ん話でもない、念の為、桜火殿には再び子作りに励んでもらうとするか」

炎術士は火影一族の象徴、里の存続の為には、呪いの児とおもしき者を次期頭首にするなどあつてはならない。

そんな考えの元、新たな炎術士の誕生が願われる。

これより一年後、『紅麗』『飛影』四歳の年に、弟『烈火』が誕生する。

第05話 修行成果×行動開始

火影脱出から一年が経ち、三歳になった飛影は過酷な修行の日々を送っていた。

体術、剣術を中心に体を鍛え、盗んだ魔導具の扱いを覚え、黒炎、念能力の鍛錬を行った。

念能力の基本の四五行の内、自分のオーラを肉体の周囲に留める纏てんと、自分がだすオーラを完全に遮断する絶ぜつ、体内の精孔を広げ通常より多めで強いオーラを生み出す練れんはまだまだ未熟であるが習得できた。

だが、何故か発はつだけはどうしても出来なかった。

その理由は分からないが、能力作りが楽しみだったのだけにその喪失感は大い。

だが、纏、絶、練の応用技である『陰』、『凝』、『円』、『周』、

『硬』、『堅』、『流』は、黒炎で感覚を支配しコツを掴んであっさりと習得したので、まあいいか、と開き直った。

そして、飛影の要である黒炎はというと……

「邪王炎殺剣」

飛影の右手にあった黒炎は黒い剣へと変化する。

訓練の結果、ゲートや炎弾などの『放出系』の炎の使用はかなりのエネルギーを消費する事が分かった。

その結果、エネルギー消費が少ない事が分かった具現化の形で技を作り上げた。

「邪王炎殺練獄焦」

飛影の拳に黒炎が纏われる。

この技は身体の一部位に黒炎を纏う技。

エネルギー消費は少ないが、黒炎具現化の制御は細かく難しい。

黒炎の出力の問題で、今は部分的に黒炎を纏ったり剣を形作るのが今のエネルギー量では精一杯である。

一度、この問題を解決しようと右腕に巻かれる包帯型封印具を外そうとしたが……

途中、制御しきれない膨大な炎が溢れ出て来たと同時に、とてつもない疲労感に襲われ、結局包帯を巻き直す事になった。

今の、飛影のエネルギー量だと、一時間程なら黒炎を具現化出来るが、放出系になると30分程度でエネルギー切れを起こし、倒れてしまう。

黒炎は万能だが、持久力が無い今の状態では、やはり不安が残る。

そこで、魔導具や念能力の練度を上げ手数を増やし、黒炎はここぞと言うときの切り札とする事にした。

他にも戦闘の際、最後の最後で黒炎を見せつけて、相手が打つ手がなくなり絶望した顔を見て楽しみたいというゲスな考えもある。

ぶっちゃけ、このエネルギー問題が分かった時はかなり焦った。

もし火影脱出の際に、里総出で襲われたら負けていたかも知れない。

時間制限のある黒炎では数で押されると危険。

まあ危なくなったら逃げればすむのだが……

あり得ないがもし黒炎を封じられたりとかしてたら打つ手無しだった。

まだ一年前だが、あの頃は体力もなく、チート能力に慢心していたし、今思えばロクな飯も食わされず、監禁という極限の状態であった事から、まともな思考回路ではなく、こんな基本的な事も気付かない状態だったようだ。

因みに、技のネーミングは、幽遊白書の飛影の邪王炎殺拳を引用した。

「もうじき、烈火誕生かな？」

記憶が正しければ烈火誕生後、火影の里は襲撃された筈である。

烈火が赤ん坊の頃の紅麗は恐らくだが五、六歳。

とすれば残り二、三年で火影滅亡である。

そんなことを考えるとワクワクと感情が高まる。

どうやら自分は、心の底から火影滅亡を願っているようだ。

虐待、監禁された里に愛着があるはずが無いのは当然といえば当然。

そう自覚すると、もつと絶望や悲しみに満ちた心躍る火影滅亡の瞬間を見てみたい。

まあ、なんにせよ、全ては次の目標を支配してから考えよう。

「天堂地獄ちゃん会いに行きますよ」

家の中の物を全て蔵王に入れて、旅の準備は完了。

「ここには、もう来ることも無いし更地に戻すか」

石棍を地面に突き刺すと石造りの家は地中へと消えていった。

目的地は、天堂地獄封印の地。

烈火誕生までには時間があるので、修行しながら、旅をするとしよ

う。

「やべっ、良いこと思いついた！」

ふとひらめいたその思い付きにシニカルな笑みを浮かべると、飛影は住み慣れた山を降りていった。

第06話 滅亡に一手加え、仲間？を作る

「一攫千金だぜ!!」

飛影は、欲望を隠す素振りも見せず、目の前にある山積みになった千両箱を手当たり次第に蔵王に入れていった。

封印の地までの道中、飛影はお宝の臭いを嗅ぎ取り、城を見つけては盗みを働いていた。

そして、犯行後に必ず書き置きを残し、その存在を知らしめる。

「宝は頂戴した、火影忍軍……つと」

壁に書いたそのメッセージで、火影の仕業だと誤解させ、「織田軍以外にも目を付けられればいいんじゃないかね？」という火影への、たちの悪い嫌がらせだ。

事実、盗みに入られた城主達は、火影討伐とお宝奪還の為に徒党を
組み色々と調べ初めているようだ。

「その調子で頑張てくれれば、大量の餌が手には入るかもな」

うまい事この哀れな城主達を火影滅亡の日に火影の里まで導けば色
々面白い事になりそうだ。

一方では織田軍、もう一方では、討伐連合軍。

その両方に作戦を与え、逃亡不可能な包囲網をしかせる。

はたして逃げ場を無くした火影一族は、どのような行動に移るのだ
ろうか……

原作通り、魔導具を使わず滅びるか、魔導具を使い迎撃に打って出
るか。

まあ、どちらにせよ火影滅亡は変わらない。

最後、その場に立っているのは俺一人だけなのだから。

「織田軍が動きを見せたら、情報をリークするか」

影界玉で遠隔透視し、織田軍の情報は得ているが、まだその時期では無い。

「封印の地はすぐそこ……だが、何匹かネズミがいるらしい」

影界玉で調べると、忍装束を来た火影忍軍らしき人影がチラホラ目に入る。

「ちょうどいい、天堂地獄の依り代にでも使うか」

天堂地獄は海魔の魂が入った複数の眼球からなる魔導具。

肉体が無い為、人体に寄生する事でその力を発揮し始めるので、復活には人体が必要。

「でも、あんなキモいの俺の体に入れたくないし、犠牲になるのはしょうがない事なのよねえ」

所詮は人事、自分の欲望の為ならどんな犠牲も致し方ない。

まずは、あの中の一人を黒炎で支配し、そいつに他の忍びの始末をさせる。

エネルギー消費も少なく、無駄の無いいい作戦だ。

「よし、君に決めた！」

忍び連中はみる限りでだれ揃いの強者達。

その中でも一番強そうな人物へ狙いをつけた。

絶で、オーラを絶ちその気配は無くなった。

そこから、被った者を透明にする布型魔導具『おぼろ朧』を頭から被った。

そして、影界玉で影を移動し対象の背後に立つ。

ボワッ

邪王炎殺剣

ザシュ

斬り伏せ、男は飛影の支配下に下った。

他の忍びは、まだ男の変化に気付いていない。

「……斬り捨てる」

「御意」

命令に従い男は腰の小刀を素早く抜くと、前を歩く男の左胸に突き刺した。

「なっ何故……ガハッ」

そして、男の小刀の刀身は姿を変え二俣の蛇となり他の者へと襲いかかる。

「なっ」

「ぐわっ」

「クソッ」

突然の裏切りに戸惑い動きを鈍らせた結果、次々と倒れて行く忍び達。

「へえ、やるじゃん。しかもその小刀、魔導具なんだ」

自分の知らない未知の魔導具に興味を持ちつつ、男の戦闘を愉快な様子で観戦する。

「終わりました」

「じゃあ魔導具回収して、俺の後に付いて来い」

倒れ伏す屍の体を弄り、魔導具を回収する男の瞳に後悔の色はない。

支配下に置かれた者にとって、飛影の命令は絶対であり、命令を遂げる事こそ生き甲斐となる。

所謂、洗脳状態にあるのだ。

しかも、一度黒炎に犯されると解除は困難で、生涯奴隷の道しか残ってはいない。

「飛影様、回収終わりました」

「おつ蔵王あるじゃん、とりあえずそん中に入れといて……にして俺の事知ってるんだ。で、俺を捕まえに来たのかな？」

魔導具には、量産型の物もあり、蔵王もその部類に入るようだ。

「はい、飛影様が何者かに攫われたと見た里の命により、内々で魔導具回収と飛影様奪還の任務を受けました。どうやら里の推測は間違いだっただようですが…」

俺が、攫われただって……？

ぷっ

「ギャハツハハハハハハハハハツ！見当違いだつっの！火影は馬鹿ばっかだぜ！まあ証拠もなにも無かったから仕方ないか……でも笑える！全部俺の仕業だつてーの！キャハツハハハハハハ！」

まあ、二歳の子供がそんな大それた事をするとは思わないだろう。

しかし、これはまた、面白そうな展開になったものだ。

俺がやったとわかった時の火影の連中はどんな顔をするのだろうか？

驚き、怒り、罵り、殺しに来るかもしれない。

面白い展開だ。

「でも、その先にあるのは絶望だけだつてのは、気付かないんだろ
うなあ、俺子供だし力でなんとかなると思っちゃうよねえ」

子供の姿は、油断を誘う分にはかなり有効だ。

だが、精神的に大人な俺からしたら不便な面が多過ぎるので一刻も早く大人になりたいが……

「よし、行くか！目指すは天堂地獄奴隷化だ！」

「はっ！………えっ？何を？……馬鹿なの？死ぬの？危険なんだよ？ねえねえ死ぬの？」

奴隷の呟きを無視し、飛影は歩む。

己の欲望を満たす為、最凶の力を手に入れる為に……

第07話 天堂地獄

封印の地、地下洞窟内

内部進入直後、天堂地獄の呪いを受けたゾンビ共に襲われたが、石棍で固めて蔵王の中に入れておいた。

殺しても死なない便利な彼らには、半永久的に俺の駒として頑張ってもらおう予定だ。

「おー、明るい」

洞窟内は意外と明るく、よく見ると灯ともしびと書かれた光を発する魔導具が壁や天井に埋め込まれている。

「電球みたいだ、一応貰つとくか……………ねえ、全部回収しといて」

「はっ」

奴隷一号は嬉しそうに命令に従う。

何気に、地味でキツイ作業を頼んだ事に気付いたがスルーしとく。

黒炎で忠誠心を支配した事で、俺の命令を否定せず素直に喜んで行動するので気をつかうだけ無駄なのだ。

黙々と流れ作業のように灯を回収する男を置いて、俺は一人奥へと進んでいった。

「着いたかな？」

歩く事、約数十分、巨大な扉がある広い空間へと辿り着いた。

「確か……魔導具を……」

懷から蔵王を取り出すと、扉に向けて翳す。

すると門の中心にある骸骨のモニュメントから魔導具に向かい光が放たれた。

「おっ？」

どうやら魔導具を解析する光だったようですぐ扉に変化が現れた。

『……火影魔導具………火影所縁の者と認める………封印の扉………開放………』

骸骨の言葉と共にドゴオオオ！と音を立て扉は開かれた。

「うひょ、遂にご対面ですねー」

開かれた扉から中へ進むと、火影の紋入りの鎧があった。

その鎧は結界用の呪具に囲まれ、封印処置を施されている。

「天堂地獄……」

この世界が、烈火の炎の世界だと知ってから最も欲しいと願った物が天堂地獄。

他の魔導具にも興味は沸くが、人間を食べて、その能力を自分の物にする力は素晴らしいの一言だ。

前世でもコレクション出来なかった、人の才能や能力という物は正に新ジャンル開拓で非常に興味をそそられる。

そして、新たな欲望を満たすであろう天堂地獄へと意識を集中する。

「一撃で俺の物にしてやんよ」

黒炎の燃費を気にし過ぎて回収失敗なんて事になっては、その後の後悔は計り知れないモノとなる。

故に、全力。

「俺は！！はじめっからクライマックスだぜえ！！」

こういう興奮を押さえきれない状況になると、ついつい口が軽くなり無駄にハズい事を言ってしまうのは前世からの悪い癖だ。

その後、冷静になって思い返すと、後悔するのはいつもの事。

だが、今回はギャラリー無しのやりたい放題。

故に、俺の思考は、厨二に染まる。

と、そんな事を考える飛影をよそに……………天堂地獄が動きを見せる。

「我は……………天堂地獄……………力の者の存在に今目覚めん！！」

くだらないことを考えているうちに、どうやら天堂地獄が目覚めた

らしい。

「……一つ問う……力を欲するか？……誰よりも強く何事にも屈する事なき　　全てを凌駕する力！！」

いちいちセリフ口調なのが気にさわるが、ここはあえて言うてやるではないか…

「欲するかって？ああ欲しいねえ、その全てを凌駕する力……俺が貰ってやるぜ！！」

ボワッ

黒炎を展開して呪具ごと天堂地獄の周りを囲みドーム状へ黒炎を変化させた。

「くくくくく……流石は忌ま忌ましき火影の血を引く愚か者よ……頭の悪き事この上無し……このような炎如きで我を封じようとは愚かなり！！」

いくら、火影の炎術士と言えど相手は子供……今はまだ完全体にはほど遠い姿ではあるが、子供の放つ炎など容易にかき消せる……と天堂地獄は考える。

飛影の幼い容姿に、天堂地獄は完全に油断していた。

そして、あざ笑いながら天堂地獄は、光を圧縮し始める。

「この愚か者があ!!」

飛影を的に放たれた粒子砲は、黒炎の壁へと近づく。

「なっ!」

……が、黒炎に触れた箇所から光は拡散していった。

「甘あい!甘すぎるぞ!天堂地獄!!俺の炎にかなうモノなどこの

世にありはしないっ！これで終わりだ！！」

黒炎は炎の渦を巻きながらドーム内部へと浸食して行く。

「ふざけるなあー！！」

抵抗しようと粒子砲を放つが効果無し。

ボワーーーーボワワワワッ

黒炎に飲み込まれる天堂地獄。

「ハハハハハッ！余裕すぎる！俺は：また一つ力を手に入れたのだ！！」

勝負は驚くほどあっさり決まった。

その身全てを黒炎に触れられてしまったのは、もう天堂地獄に打つ手

無し。

油断せず、初手から全力で、逃げ場の無い炎を展開した飛影の決断とチート炎の勝利である。

さて、天堂地獄を使って何をしようか……そう考えると、笑いがこみ上げにやけてしまう飛影。

「ハハハハハッ！！チヨロい！チヨロ過ぎるぞ天堂地獄！ハハハハハッ！！」

「飛影殿おめでとう御座います！！」

「ハハハハハッ！！……ハッ？」

突然現れた奴隷一号に、厨二発言を聞かれたか？と固まる飛影。

「おっおう！かつ回収は終わったのか？」

「はっ、まだ途中であります。しかし、あの天堂地獄相手に圧勝とは、実に素晴らしい戦いでありました。何より闘志溢れる掛け声は実にあっぱれで御座いました！」

「……………そうか」

一号の誉め言葉に照れながらも、頭の中では黒い考えが浮かんでいた。

闘志溢れる掛け声と言った一号の言葉は、厨二発言を聞かれたという事実を物語っている。

不幸な事だがそれは飛影のちっちゃなプライドを傷付ける行為だった。

このような黒歴史は早々に隠滅しなければならない。

故に、飛影は動く。

「天堂地獄……あれがお前の体だ……魂まで食らいつくせ……」

「ほえっ？なにを……」

こちらを指差す飛影を見ながら一号は考え、死が間近に迫っているのだと理解し始めた。

そして、死に際にこう思った。

《たっ魂まで食らいつくすだど……？褒めえだけなのに……どつどつどうして……どうしてこうなった……！！》

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……！！

火影の鎧から複数の目玉が飛び出し、一号へと飛び付く。

「グワアア……！！酷いいいよ！！」

天堂地獄に寄生される一号、こうして、彼の魂は天堂地獄のエネルギーとして運用され、飛影の厨二発言は封印された。

奴隸一号は最悪のタイミングで現れ、不用意な発言をしたせいで元々短かった命を更に短くしたのだった。

「シュツ隠滅完了!!」

第07話 天堂地獄（後書き）

お久しぶりです。

夏バテと平行してスランプに陥り約一週間振りの更新です。

頭が回らず考える程にダメになって行く文章にいい加減疲れてきたので、そのまま載せます。

どうぞ、未熟な感じですが宜しく願います。

第08話 希望の光

天堂地獄を手に入れてから一年の時が経ち飛影は今、住居を構え修行の日々を送っている。

この一年で、天堂地獄は20以上の町や村を壊滅させ、その住民を吸収することで、その体は巨大な大蛇へと変貌を遂げた。

ハッキリ言うと、デカすぎて邪魔です。

なので、物体を縮めたり大きくしたり出来る杖型の魔導具『夢幻』で手乗りサイズまで縮めた。

ちなみに、夢幻は天堂地獄に渡し自分で伸び縮みしてもらっている。

盜賊行為は順調である。

盗みの際に、火影忍軍参上！の書き置きは忘れず行っているので、新たに数十名の武将達が火影討伐に参戦する事になるだろう。

手元にある千両箱は数え切れない量となっており、陶磁器や刀、仏像など、蔵王の中は歴史的価値の高い品々で溢れかえっている。

これで、この時代で一番の金持ちになったのは間違いない。

だが、困った事にその使い道が少ないのが問題だ。

セキュリティーが甘々なこの時代背景では欲しい物は盗み放題だし、買ったとしてもたいした金額ではないのでやはり金は余る。

女を買おうにも、まだ精通も通っていない子供だし、飯も口に合わない質素な料理ばかりで味気ない、娯楽用品も生活用品も現代に比べないない尽くめで不便極まりない。

今の気持ちはと言うと「現代が懐かしくて仕方ない！！」である。

正直言つてこの時代に盗みたいと興味を覚える物は少ない。興味を持った物は大抵盗んだ。

しかも、盗みが楽勝すぎて全然スリルが無い、盗みはスリル満載なアトラクションでなければ楽しくないので欲求不満でストレスは溜まるばかりだ。

現状を打開するには、時間を遡り現代に行くのがいいのだろう。

実際、すぐにでも 別の時代 にタイムスリップする事は可能である。

火影から盗んだ書物に書かれた禁術『時空流離の術』を唱えればいい。

だが、時空流離の術はどの時代のどの場所にたどり着くかは一切不明な術ではあると書物に書いてある。

戦国時代とは違う時代には行けるが現代のように近代的でなければ意味は無い。

黒炎支配で時代調整が出来ればいいが、出来るという保証もない。

そこで、黒炎だけでタイムスリップ出来ないか試してみたが、時間に干渉するにはエネルギー量が足りないようでは出来なかった。

右腕の封印を解けば可能かもしれないが、以前解こうと試みた際の疲労感の事もあるし、よくよく考えてみれば、原作烈火が初めて封印を解いた時はたしか炎竜に喰われかけていた。

烈火が助かったのは炎竜の気まぐれ。

命の危険があり、何が起こるか分からない以上は封印しておくのが一番無難だと思う。

そういえば、原作で紅麗が最後に時空流離の術を使い、希望通りの時代に行っていたので、もしかしたら時代調整は可能かもしれない。

しかし、確実ではないので、一度試してみるほか無いと思う。

だが、時空流離の術を一度使ってしまったえば不死の呪いに掛かり死ねない体となってしまう。

幼児体型のまま一生を過ごすのはイヤなので、ここは天堂地獄に術を唱えてもらい実験ことにしよう。

もしかしたら、不死の呪いによって驚異の再生力が備わり、天堂地獄の弱点であった細胞分裂による弱体化が無くなるかもしれない。

一度、分身体を作ってしまうと、もう一つには戻れずどんどん弱くなっていく天堂地獄にとって、分身体を作ってもすぐさま回復する再生力は願ってもない力だ。

原作で天堂地獄が時空流離の術を知らなかった可能性は、ここにいる天堂地獄の証言から除外された。

天堂地獄は術の副作用も知らなかったみたいなので、原作では治癒の少女『佐古下柳』の吸収で弱点を補おうしたのだろう。

まあぶつちやけ、現代に行ければ多々ある不満は解決するので、不死の呪いは副産物としてあってもいいかな？ぐらいに思っている。

弱体化したら、人間を吸収すれば元に戻るのであまり深く考える事もない。

それにこの方法がダメでも、治癒の少女を吸収すれば弱点は補えるので問題ない

まあ、チート黒炎があれば大抵の事は何とかなるので気楽に考えている。

「はあああ！ふんっ！ふんっ！海魔こんなもんでどうよ」

海魔とは天堂地獄を作り出した魔導具鍛冶師であり、天堂地獄に魂を移した天堂地獄の主人格であり、今のような通常時は、人型の姿で形を保っている。

飛影は今、海魔（天堂地獄）から魔導具作りを教わりながら、海魔が知る知識の全てを絞り取っている。

幼い頭脳は記憶の吸収率がすざましく飛影は驚きの速度で知識を吸収していった。

「ふむ、魔力コントロールはうまくなってきましたな。この調子でいけば直に魔導具作りにも取り掛かれますよ」

「そうか、あー魔導具早く作りてえ！」

海魔が言うには、魔導具とは核となる水晶玉に大量の魔力でイメージした能力に相応しい文字と術式を刻み込む事で完成する。

『魔力』と『気』、海魔の話ではこの二つのエネルギーが人体には宿っているらしく、魔力と呼ばれる精神エネルギーは、修行や経験によって蓄積されたエネルギーで、気と呼ばれる身体エネルギーは人間の体を構成する膨大な数の細胞の一つ一つから取り出すエネルギー

ギーの事をいうそうだ。

炎術士は魔力を餌に炎を発現し、忍術は気に魔力を練り上げて印を結ぶ事で発動するらしい。

因みに、天堂地獄には負を連想させる全ての文字が小さく大量に刻まれて眼球のような紋様になったという。

「おやつ、どうやら主殿のおっしゃる烈火とやらが誕生したようです」

「おっ！ついに烈火が産まれたか」

飛影は、睡眠いらずの海魔に影界玉で火影の里や各武将達を常に監視させていた。

海魔が手にもつ影界玉には、桜火に抱えられた赤ん坊『烈火』の姿

が映し出されている。

「烈火が産まれ、信長が動き始め、他の武将達も必死に火影を探し回っている……そろそろ仕掛け始めるか」

烈火と紅麗は、原作通りタイムスリップをしてもらう。

何故かというと、2人には無事原作通りに成長してもらい、自分の炎の型が盗まれて絶望する姿を見て楽しみたいからだ。

「クツクツクツ、あー楽しみだなあー」

この陰謀によって絶望する火影の民や、両親、里の上役達の顔を想像すると笑えてくる。

「クッククック、海魔には絶好の餌場を提供してやるよ」

「フフフツ、それは楽しみですなあ」

不気味に笑いあう最凶コンビの凶行は誰にも止めることは出来ない。

希望は無くなり、この世界の全ては2人に奪い尽くされてしまうのかもしれない。

しかし、飛影のような全てを覆い尽くす闇があるように、闇にさす一筋の光もまた存在する。

そして、時は現代……

「この力はそういうことだね、名前も同じだし……はぁ……逆境だぁぁぁ！」

少女は己の未来に悲観し溜め息を吐く。

「佐古下柳って、烈火の炎の生け贄キャラじゃん！最後は助かったけど、過程が悲惨すぎるっ！！ぁぁぁぁ！逆境だぁぁぁぁぁ！！」

1人の転生者が遠い未来で産声を上げる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719u/>

飛影の黒炎

2011年7月14日20時48分発行